

- 99 性莫乖常道 性は常道に乖くこと莫し  
 100 宗當任自然 宗は當に自然に任すべし

【十一段】

この十句では、老莊の世界に我が身を置くことに飽き足らず、「儒家として作詩への執着」を詠う。ここには、「477詠樂天北窓三友詩」の中でも繰り返したわれているように、「詩は志の之く所なり。心に在るを志と為し、言に発して詩と為る」という『詩経』『大序』の一文を拠り所として、為政者に詩という詠作を通し、諷諫する使命を持つ「儒家」としての道真自身の我が身の再認識・矜持が込められている。単なる風流風雅をめぐる心情を詠んでいるのではない。

- 101 殷勤齊物論 殷勤たり齊物論  
 102 洽恰寓言篇 洽恰たり寓言篇  
 103 景致幽於夢 景致夢よりも幽かなり  
 104 風情癖未痊 風情の癖未だ痊まず  
 105 文華何處落 文華 何れの處にか落つる  
 106 感緒此間牽 感緒 此の間に牽かれたり  
 107 慰志憐馮衍 志を慰めて馮衍を憐れむ  
 108 銷憂羨仲宣 憂を銷して仲宣を羨む  
 109 詞拊觸忌諱 詞 拊むは忌諱に触るればなり